

2 実際の作業のポイント

野菜づくりの要点

1. 排水促進

暗きょや排水溝をつくる。表面排水路をつくる。

2. 作土を深く

30cm位に深耕する。

3. 有機物の多用

完熟堆肥の利用と生ワラ施用は早めに。

4. 酸性土の改良

土壌に応じた石灰質肥料の施用。

5. 高うね作り

うねの高さ20～30cmとして、根ばりをよくする。

6. 病虫害防除は早めに

農薬の適正使用で早期防除につとめる。

7. 連作をさける

同一作物の連作をさけ、2～3年ごとにトウモロコシなどイネ科をつくる。

1. 床づくり

(1) 前作の清掃と耕起反転

タネをまいたり苗を植えたりする前に、前作の野菜の茎や葉、根を清掃し、畑全面に石灰か苦土石灰をふります。(10㎡当たり2kg程度)。これは酸度を中和するためです。また、同時に有機物や堆肥などを施用しておくとも水分や肥料が土に保たれやすくなります。

その後、スコップ等で30㎝くらい起こし、堆肥と石灰と土がよく混ざるように反転します。この作業は、前作が終わってから出来るだけ早く行います。特に次作の2～3週間前までには終わっておきます。

(2) 元肥と追肥のやり方

元肥は、畦を立てる前に施します。畦全面に施して、3本鍬(くわ)等で土の塊を崩しながらよく混ぜます。

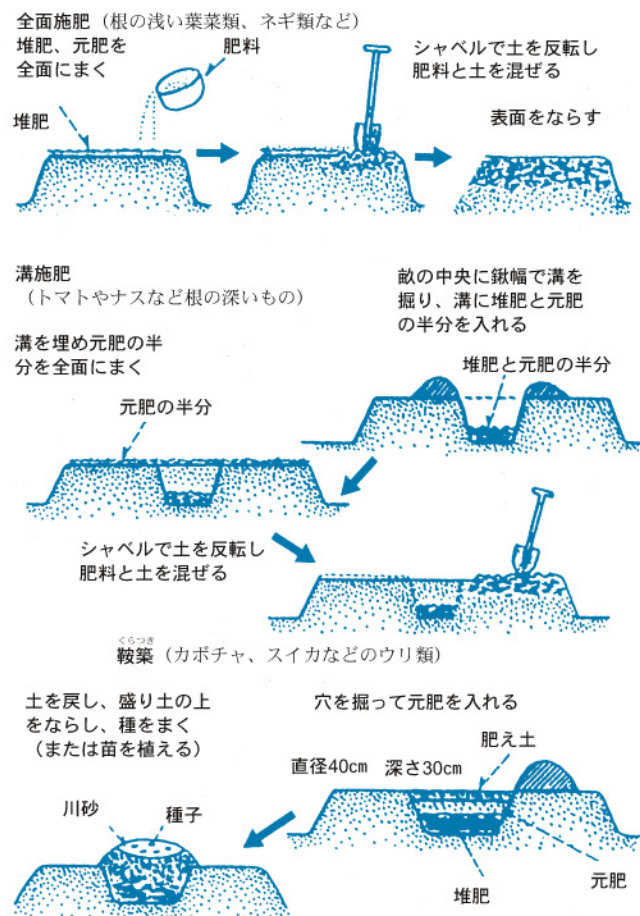
①葉菜類の場合

葉菜類は、生育期間の短いものが多く、茎や葉を大きくするため、効きの早い速効性肥料を利用します。

地ごしらえの順序



元肥のやり方の例



の間、2回目は畝の肩か条間に、3回目は2回目と反対の肩か条間に施します。

2. 苗の作り方

露地育苗

夏や秋のキャベツ類、春秋のネギ類、秋のレタスなどの育苗は簡単に出来ます。

少量の苗を育てる場合は、木のとり箱に作ってもいいのですが、始めから畑に苗床を作ったほうが生育は良くなります。

種まきの10～15日前に、1㎡当たり、石灰200gと堆肥1～2kgをまいて耕起しておき、油粕なら150g、発酵鶏糞なら300gを全面にまいて、もう一度シャベルで土を反転し、表面の土を砕いて、レーキでならします。

畝幅は1m程にし、種子は全面にまくか、まき溝を作ってまきます。移植床も同様に作ります。畝の方向は秋から春までは東西の方向に作ります。真夏は南北の方向に作ると良いでしょう。朝日は全面に受けても、日中の強い光線は遠くから入るようになるためです。真夏は強い光線と熱さによる乾燥を防ぐために、苗床の上に高さ0.8～1mの寒冷紗の日除けをします。

キャベツ類など移植するものは、活着するまでは乾かさないように水やりをすることが大切です。

春に植える果菜類の苗は、種苗店で買うか、苗を専門に作っている農家に分けてもらう方が確実で簡単です。特に、果菜類については、接ぎ木がされてある苗を購入した方が、病気に強く作りやすいのでよく見て購入してください。

②根菜類の場合

根菜類は、根を大きくするので、カリの多い緩効性肥料を使います。特に、大根などの根を収穫するものは、株の真下に肥料が多いと又根になります。

③果菜類の場合

果菜類は、生育期間が長く、順々に収穫するため、元肥と追肥の併用が必要です。元肥には収穫が終了するまでの全量の2分の1から3分の2くらいとし、リン酸の多い肥料を施します。追肥にはチッソとカリの成分の多い肥料を利用します。

追肥は、生育期間が長く途中で肥料切れする野菜に何回かに分けて施します。

一般には、間引きの終了した時点で、第1回目、本葉が4～5枚の頃に2回目、本葉7～8枚で3回目を行い、果菜類ではそれより回数が増えます。

特にトマト、スイカなど実のつく野菜は、最初の実が大きくなり始めた頃が第1回目の追肥時期になります。後は、生育の度合を見て行います。

追肥を施す場所は、根の先端付近がもっとも効果的ですので、生育に合わせて、徐々に野菜から遠いところへ行きます。1回目は株